

## 学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	山下 世史佳
2. 審査委員	主 査：（岡山大学教授） 虫明 眞砂子 副主査：（上越教育大学教授） 松本 健義 委 員：（鳴門教育大学教授） 頃安 利秀 委 員：（兵庫教育大学教授） 初田 隆 委 員：（兵庫教育大学教授） 新山 眞弓 委 員：（岡山大学教授） 安藤 美華代
3. 論文題目	高齢者の歌唱活動による変容と自己の生成
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 山下世史佳 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成30年7月22日（日） 13時00分～14時00分 場所：岡山大学 北音楽棟2階 2207室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 （1）論文構成</p> <p>序章 本研究の目的と方法 第1章 高齢者の歌唱活動 第1節 歌唱活動と高齢者 第2節 高齢者の音楽学習 第3節 高齢者の音楽療法 第2章 高齢者が歌うこと 第1節 高齢者が歌唱で涙を流すこと 第2節 高齢のプロ歌手が歌うこと 第3節 アマチュア音楽家が歌うこと 第3章 歌唱活動に関わる高齢者への意識調査と語り 第1節 合唱に関わる高齢者への意識調査 第2節 カラオケに関わる高齢者への意識調査 第4章 高齢者向け歌唱プログラム 第1節 歌唱プログラムの開発 第2節 歌唱プログラムの実践 第5章 歌唱活動を通じた高齢者の変容と自己の生成 第1節 自活者－歌唱教室参加者の変容と自己の生成 第2節 ケアを必要とする者－認知症者の変容と自己の生成</p>

第3節 ケアを必要とする者—うつ病女性の変容と自己の生成

第4節 ケアを必要とする者—アルツハイマー型認知症女性の変容と自己の生成

第6章 高齢者の歌唱活動による変容と自己の生成

第1節 高齢者が歌うことの共通性

第2節 本研究における高齢者向け歌唱プログラムの検討と実践の偏り

第3節 高齢者の歌唱活動による変容と自己の生成

終章 総括と今後の研究課題

引用・参考文献リスト

## (2) 論文の概要

本研究の目的は、歌唱活動により芸術的志向を高めることを通して、高齢者が変容することで生活を創造するとともに自己を生成させていくことを、歌唱活動の実践やインタビュー等の質的なアプローチを中心に解明していくことである。また、高齢者のクオリティ・オブ・ライフ (Quality of Life) やウェルビーイング (Well-being), サードエイジ (Third-age), サクセスフル・エイジング (Successful-aging), 生きがいといったキーワードに象徴されるような、歌唱活動に生き生きと関わる高齢者の実態を明らかにすることである。

第1章では、高齢者の音楽活動が行われる場所と内容を精査した。高齢者を対象に行われている民間の歌唱活動と講座の概観、音楽教育と音楽療法の両面における歌唱活動の位置づけと、生き生きと老いることをテーマに音楽学習に取り組んでいる高齢者像、高齢者の QOL (Quality of Life) や ADL (Activities of daily living) の向上のために行われる音楽療法の重要性、対象者の主体性に語りかけるようなアプローチについて述べた。

第2章では、高齢者の歌唱における涙の表出、高齢のプロ歌手やアマチュア声楽家の歌との関わりについて述べた。彼らが歌うことで生活を創造し、実存的な生きる価値を知覚していることや、歌唱活動に取り組むことで「幸福な老い Successful aging」を生み出していることを示した。

第3章では、合唱とカラオケの活動に関わる高齢者への意識調査と語りについて述べた。合唱に関わる者は、歌うことで「楽しみ」「健康」「音楽の追求」「歌の上達」「仲間作り」といった自己実現と社会的関係の充実に目を向けていた。両者ともに、歌うことが日常生活と深く関わり生活に浸透し、人生を意味づけるような大きな影響を及ぼしていることを示した。

第4章では、高齢者向け歌唱プログラムの開発と実践について述べた。山下が開発し本研究で実践した歌唱プログラムの内容、実践前中後の注意点、参加者と内容の対応等を詳細に示した。同プログラムにおけるウォーミングアップの効果についての実践研究の結果から、高齢者の心身や行動の良好な変容が得られた。

第5節では、筆者の行う歌唱教室に参加する自活者、ケアを必要とする認知症者、うつ病女性、アルツハイマー型認知症者に対する歌唱実践を取り上げ、歌唱活動を通じた高齢者の変容と自己の生成について、質問紙調査、ライフストーリー・インタビュー、ビデオ記録により、語りと映像の質的分析をした。上記高齢者は歌唱活動によって心身に変容が起こり、他者との関わりや自己との対話が賦活され、記憶の中から想起される自己、他者との関わりにおける自己から、今ある自己やこれからの自己を生成していた。彼らは今を生きることを受容し、生きていくことの喜びや存在意義を感じていた。

第6章では、歌唱活動に関わる高齢者の共通性を、音楽療法、音楽学習、あらゆるタイプの高齢者における歌唱活動という観点から導き、高齢者の生きるエネルギーや人生経験によって、高齢者の歌唱活動が芸術的活動へと発展できることを示し、本研究における高齢者の変容と自己の生成の関係を図示した。

本研究によって、歌唱活動が多角的に生きる意味を与え、一人一人の人生を芸術的活動へと変容させることが明らかになった。そして、それらの変容による自己の生成で、高齢者の QOL が向上し、人によっては「幸福な老い」 (Successful aging) へ向かい、人によっては生きがいや「身体的、精神的、社会的に良好な状態にあること」 (Well-being) を得られることが示唆された。

## 2. 審査経過

審査員6名は、提出された学位論文を精読したのち、平成30年7月22日（日）に岡山大学北音楽棟2207室にて公聴会を実施した。公聴会に引き続き、同室で審査委員により学位論文の審査を行った。

### (1) 論文の独創性について

高齢者の歌唱活動は、一般的に、生涯学習や福祉的な実践と対外的には位置づけられるが、本研究では、高齢者の歌唱活動を芸術的意義があると位置づけ、歌唱活動が高齢者の日々の生活や自己を創造していくような教育的側面を検討したものである。また、本研究は、高齢者の歌唱活動を通しての実践研究であり、音楽療法、社会学、心理学、教育および芸術の領域など専門領域が重なり合い、高齢者の歌唱活動を多面的にみていく研究となっている。さらに、高齢者のさまざまな歌唱活動について、事例分析、会話分析、ライフストーリー・インタビュー、ビデオ画像を用いた表情や身体表現の観察等を行い、歌唱活動に共通のキーワードを導き出した。

### (2) 論文の発展性について

高齢者の歌唱活動の福祉的意義、芸術的意義、教育的意義がどのように重なり合って、総合的な実践として、どのように創造されていくのか、また、高齢者本人が過去の薄れていく記憶の中で、歌唱活動をとおして、どのように主体的に、人生の意義を再定義していくのか。これらの点を追求していくことによって、高齢者の歌唱活動の位置づけや意義がさらに明確になっていくのではないか。また、本研究により導き出された高齢者の生の充実と創造を構成する各キーワードについて、歌唱活動のプロセスや積み重ねを解明していくことで、更なる高齢者の歌唱活動の研究の発展が期待される。

### (3) 教育実践への貢献および社会的貢献について

本研究では、高齢者の歌唱活動が、幼少期から児童期、青年期までの学校教育における歌唱活動に深く根差していることを、事例研究により明らかにしている。このことは、学校教育において年齢に沿って実施される歌唱活動の相互の関連性と一貫性が、生涯学習の観点から、いかに重要であることを示唆するものである。現在の音楽科の歌唱授業が、子ども達もいずれ迎えることになる、高齢期の歌唱活動の基盤となることを考えると、学校教育における歌唱授業の更なる充実が求められる。また、高齢者の歌唱活動は、唱歌やわらべ歌の伝承という観点からも、幼児や児童生徒に与える影響は大きいものがあると考えられる。さらに、超高齢化社会を迎えた現在、本研究で検討した高齢者の歌唱活動は、高齢者の心身や日常生活の質の改善を通じた、社会福祉の充実への社会的貢献が期待される。

## 3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、山下世史佳の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。